

1日目

福岡空港 ⇒ 関西空港 07:50 ⇒ 08:50 ANA 1702便

関西空港 1・2番ホーム 南海空港線 空港急行 なんば〔南海線〕行 09:13発
 ⇒(9分) 09:22着 和泉佐野駅 南海本線区間急行 和歌山市行 09:33発
 ⇒(37分) 10:10着 紀ノ川駅 2番ホーム 南海加太線 加太行 10:27発
 ⇒(22分) 10:49着 加太 駅 運賃・・・970円

加太ウォーキング

加太駅 ⇒ 春日神社 ⇒ 9阿弥陀寺 ⇒ 観音堂 ⇒ 大師堂 ⇒ 淡嶋神社 距離／約2.0km

加太 ⇒ 紀州加太国民休暇村 南海電車加太駅脇「バス乗り場」発 (送迎バス) 所要時間10分
 12:55、13:55、14:55、15:55、16:55、17:55
 深山砲台跡、展望台など自然歩道歩き 約3km 1時間

紀州加太国民休暇村 泊

2日目

(送迎バス 休暇村 紀州加太発 8:40、) ⇒ 加太駅 発 9:02 和歌山市駅 9:26着 330円
 JR和歌山市駅 09:53発 (7分) 10:00着 ⇒ JR和歌山駅着 190円

JR和歌山駅 ⇒(徒歩 2分) 宿 「ホテルグランウ"イア和歌山」 荷物預け

宿 ⇒ JR和歌山駅 10:48発 4・5番ホーム<当駅始発> JR紀勢本線〔きのくに線〕 御坊行

⇒ 10:54着 JR紀三井寺駅 運賃 190円 ⇒ (徒歩) ⇒ 紀三井寺

⇒ (車で10分) ⇒ 玉津島神社⇒ (徒歩) ⇒ 塩釜神社 (徒歩) ⇒ 不老橋 (徒歩)

⇒ (徒歩) 妹背山 観海閣 ⇒ (徒歩) 和歌浦(片男波公園) ⇒ (徒歩) 紀州東照宮・和歌の浦天満宮

⇒ (車で10分) 高津子山展望所 ⇒ (車で10分) ⇒ 番所庭園 ⇒ (車で10分) 養翠園・湊御殿

⇒ (車で15分) ⇒ 和歌山城 (見学 紅葉溪庭園・紅松庵 含む 約90分)

⇒(バスで10分) JR和歌山駅 ⇒ 夕食 ⇒ 「ホテルグランウ"イア和歌山」(夕食なし、朝食付き)

3日目

「ホテルグランウ"イア和歌山」(荷物預け) (徒歩) ⇒ JR和歌山駅

JR和歌山駅 ⇒ (JR和歌山線) ⇒ JR岩出駅 ⇒ (タクシー) ⇒ 根来寺 ⇒ (タクシー) ⇒ JR岩出駅

⇒ JR粉河駅 ⇒ (徒歩) ⇒ 粉河寺 ⇒ (徒歩) ⇒ JR粉河駅 ⇒ JR和歌山駅

(徒歩) ⇒ 「ホテルグランウ"イア和歌山」(荷物受取) (徒歩) ⇒ 関空行きバス乗り場 片道 1,150円

J R 和歌山駅⇔関西空港第1ターミナル 約40分 J R 和歌山駅発 16:20、17:00、17:40

関西空港 19:45 ⇒ 21:00 ANA 1709便 ⇒ 福岡空港

費用

福岡空港 ⇔ 関西空港 航空運賃 往復 一人 16,200円

紀州加太国民休暇村 一泊 朝夕二食付き 和洋室 二人部屋 一人 13,100円 (別途入湯税 150円)
<https://www.qkamura.or.jp/kada/>

ホテルグランウ"イア和歌山 一泊 朝食付き 夕食なし 禁煙ツイン 一人 6,500円
<http://www.granvia-wakayama.co.jp/>

関西空港 ⇒ 加太駅 970円

加太駅 ⇒ 和歌山市駅 ⇒ 和歌山駅 520円

和歌山駅 ⇒ 岩出駅 ⇒ 粉河駅 ⇒ 和歌山駅 860円

和歌山駅 ⇒ 関西空港 バス 1,150円

上記小計 39,450円

入園料

昼食代 3食分

夕食代 1食分

タクシー代 各 乗車分

その他雑費

概算 5万円 程度

紀州加太国民休暇村

<https://www.qkamura.or.jp/kada/>

ホテルグランウ"イア和歌山

<http://www.granvia-wakayama.co.jp/>

08時

和歌山駅始発 08:19発 ⇒ 08:40着 岩出駅 (21分) 奈良行 240円

09時

和歌山駅始発 09:04発 ⇒ 09:23着 岩出駅 (19分) 奈良行 240円

和歌山駅始発 09:50発 ⇒ 10:11着 岩出駅 (21分) 奈良行 240円

11時

岩出駅 11:11発 ⇒ 11:23着 粉河駅 (12分) 奈良行 210円

岩出駅 11:44発 ⇒ 11:56着 粉河駅 (12分) 粉河行 210円

12時

岩出駅 12:14発 ⇒ 12:26着 粉河駅 (12分) 奈良行 210円

岩出駅 12:44発 ⇒ 12:56着 粉河駅 (12分) 粉河行 210円

13時

岩出駅 13:14発 ⇒ 13:26着 粉河駅 (12分) 奈良行 210円

岩出駅 13:44発 ⇒ 13:56着 粉河駅 (12分) 粉河行 210円

13時

粉河駅 13:00発 ⇒ 13:36着 和歌山駅 (36分) 和歌山行 410円

粉河駅 13:30発 ⇒ 14:06着 和歌山駅 (36分) 和歌山行 410円

14時

粉河駅 14:00発 ⇒ 14:36着 和歌山駅 (36分) 和歌山行 410円

粉河駅 14:30発 ⇒ 15:06着 和歌山駅 (36分) 和歌山行 410円

15時

粉河駅 15:00発 ⇒ 15:36着 和歌山駅 (36分) 和歌山行 410円

粉河駅 15:30発 ⇒ 16:06着 和歌山駅 (36分) 和歌山行 410円



関空行きバス乗り場







- 1 本殿
- 2 授預所(じゅよしょ)
- 3 姿社(すがたしゃ)
- 4 御神水(ごしんすい)
- 5 [紀文稲荷社\(きぶんいなりしゃ\)](#)
- 6 [遷使殿\(せんしでん\)](#)
- 7 [雛倉\(ひなくら\)](#)
- 8 [御神木\(ごしんぼく\)](#)
- 9 [針塚\(はりづか\)](#)
- 10 [浄火](#)
- 11 [宝物殿](#)
- 12 [末社\(まつしゃ\)](#)
- 13 [塩壺\(しおつぼ\)](#)
- 14 [大国主社\(おおくにぬししゃ\)](#)
- 15 [神輿倉\(みこしぐら\)](#)
- 16 [紀文の帆柱\(きぶんのほばしら\)](#)

紀文稲荷社	淡嶋神社の近くで生まれ巨万の富を築いた紀国屋文左衛門が、江戸に移り住む前、淡嶋神社に奉納したお稲荷さん。
遷使殿	ご祭神の少彦命名の使い神である蛙をまつっています。本殿でお願いした事をしっかりと伝えて下さいと使い神に託します。
雛倉	奥にある白い社には、以前は徳川家より奉納された雛人形が入っていましたが現在は古い雛人形のみを納めています。(紀州徳川家10代藩主治宝建立)
御神木	芳樟(ほうしょう)の木。
針塚	毎年2月8日に行われる「針供養」の後、この針塚に針を納めます。
浄火	お祓いを受けた人形を燃やす所です。
宝物殿	地下1階、地上2階建て、徳川家より奉納された雛人形や宝物を展示・保管しています。
末社	ご祭神と八百万の神をまつり、安産・子請授・婦人病等、女性の願いが叶うところです。
塩壺	通称、お歯黒石。この水をはにつけると歯痛が消えたところから身体の痛い部分にこの水をつけると治るとされています。
大国主社	ご祭神の少彦命名とともに国づくりを行った大己貴命(大国主命)をお祀りしています。
神輿倉	江戸時代に出開帳に使われた神輿。
紀文の帆柱	紀国屋文左衛門のみかん船の帆柱。願い事を唱えながら、この柱の穴をくぐり抜けると、願い事が叶うと言われています。



雛流しの神事で有名な淡嶋神社の拝殿には所狭ましと人形がぎっしりと並んでいます。幻想の世界が目の前に広がり、神秘的な雰囲気にもまれそうになります。

ここは薬の神様とされる少彦名命(すくなひこなのみこと)を祭神とし、婦人病や安産祈願など「女性のための神様」として、昔から信仰を集めております。

供養のために2万体ともいわれるひな人形が奉納されている本殿は天正13年(1585年)、豊臣秀吉の紀州征伐で全焼した後、浅野幸長が再建、紀州徳川家初代・徳川頼宣が修復、江戸時代末期に第十代・徳川治宝が造営したものである。

昭和54年(1979年)には傷みが目立つようになった社殿を覆うような形で新社殿が造営された。

神宝として神功皇后奉納の金銅造丸鞘太刀(国宝)、護良親王奉納の大円山形星兜(国宝)などが伝わり、この神社が古くから皇族や有力武士の厚い崇拝を受けていたことがわかる。

当地は古代から南海道を往来する船舶の要衝にあたり、神社の建物には一部、木造船の部材が再利用されている。

「紀伊続風土記」は紀伊国屋文左衛門の出身地、そしてそのみかん舟・梵天丸の出帆地が加太浦であると伝え、文左衛門の家に祭られていたと伝わる稲荷社も境内に鎮座する。

- A** スタートは宿舎周辺、右に行けば展望台があり加太の町や紀淡海峡、友々島が一望でき、隣にはプールがあり夏場はお子様連れの人々で賑わいます。そのまま来た道を戻り宿舎真正面の園地に向かいます。広い園地で日向ぼっこに最適です。山手には備長炭で有名なウバメガシが見られますこの木はこの周辺では所々で多く生育しています。近くには旧陸軍の作った弾薬庫があります。そのまま道なりに進むと木々が生い茂りうす暗い道にはいります。この周辺では6月上旬ぐらいにホタルが見れることがあります。ホタルのなかでも小さいヒメホタルです。



- B** 舗装道路に出たら坂道を下りましょう。右手には暖地の海岸付近に生育し、春先に白い花を咲かせるトベラやツバキ、初夏に甘酸っぱい実を付けるヤマモモ、子供たちにも馴染みのドングリのなるクヌギの木が見られます。

左ヤマモモ 右トベラ



- C** 右手に大きなヤマザクラがありここからの道は下り道でこもれびの道と呼ばれています。その名の通り両脇にはいろいろな木々が生い茂りそのすきまから日の光がこぼれ落ちとてもさわやかな気持ちになります。



- D** 坂道を下ると、海岸へ行く道と砲台跡へ行く道の分岐点です。階段を上った先の道は砲台跡へ行く道です。下りの道は海岸へ行く道です。



- E** ここから先の道は地道で地面がぬかるんだりするので雨の降った日などは危険なので引き返しましょう。この道はヤブツバキが生え初春には赤い花を咲かせます。秋ごろにはマツの木がマツボックリを落とします、成熟した種はマツボックリから出て風に吹かれます。先にはベンチがあり紀淡海峡が一望できます。背面には休暇村の宿舎が小さく見えここまで来たのだな～と思いますよ。



標準コース ①⇒②⇒③
※約1時間のコースです。
ゆったりコース ①⇒③
※展望台で引き返しましょう。



JR紀勢本線(きのくに線)紀三井寺駅 下車約10分

拝観料 大人一人200円

紀三井寺といえば楼門から本堂前の広場までの231段の結縁坂です。



紀三井寺は、今からおよそ1230年前昔、奈良朝時代、光仁天皇の宝亀元年（AD770）、唐僧・為光上人によって開基された霊刹です。為光上人は、伝教の志篤く、身の危険もいとわず、波荒き東シナ海を渡って中国（当時の唐国）より到来されました。そして諸国を巡り、観音様の慈悲の光によって、人々の苦悩を救わんがため、仏法を弘められました。行脚の途次、たまたまこの地に至り、夜半名草山山頂あたりに霊光を覩じられて翌日登山され、そこに千手観音様の尊像をご感得になりました。

上人は、この地こそ観音慈悲の霊場、仏法弘通の勝地なりとお歓びになり、十一面観世音菩薩像を、自ら一刀三礼のもとに刻み、一字を建立して安置されました。それが紀三井寺の起こりとされています。

その後、歴代天皇の御幸があり、また後白河法皇が当山を勅願所と定められて以後隆盛を極め、鎌倉時代には止住する僧侶も五百人を越えたと伝えられています。江戸時代に入ると、紀州徳川家歴代藩主が頻繁に来山され、「紀州祈祷大道場」として尊崇されました。

正式には「紀三井山金剛宝寺護国院（きみいさんこんごうほうじごくういん）」という当時の名称を知る人は少なく、全国に「紀三井寺」の名で知られていますが、この紀三井寺とは、紀州にある、三つの井戸が有るお寺ということで名付けられたといわれ、今も境内には、清浄水（しょうじょうすい）、楊柳水（ようりゅうすい）、吉祥水（きっしょうすい）の三井より清水がこんこんと湧き出して、年中絶えることがありません。（紀三井寺の三井水は昭和60年3月、環境庁より日本名水百選に選ばれました）

西国三十三所観音霊場第2番目の札所である当寺は、観音信仰の隆盛に伴い、きびすを接する善男善女は数えるにいとまなく、ご宝前には日夜香煙の絶え間がありません。

特に、ご本尊・十一面観世音菩薩様は、厄除・開運・良縁成就・安産・子授けにご霊験あらたかとされ、毎月十八日の観音様ご縁日を中心に、日参、月参りの篤信者でにぎわいます。

春は、早咲きの名所として名高く、境内から景勝・和歌の浦をはじめ淡路島・四国も遠望出来る紀三井寺は観光地としても有名で、古来文人墨客にして杖引く人も多く、詩歌に、俳諧に、絵画にと、多くの筆の跡が遺されています。

紀三井寺は以前、真言宗山階派の寺院でしたが、昭和26年に独立し現在は、山内・県下あわせて十六ヶ寺の末寺を擁する救世観音宗（ぐぜかんのんしゅう）の総本山となっています。



「紀三井寺」

寺号は詳しくは紀三井山金剛宝寺護国院と称し、宗教法人としての公称は「護国院」であるが、古くから「紀三井寺」の名で知られる。宗派はもと真言宗山階派に属したが、1948年に独立して救世観音宗総本山を名乗り、山内子院6ヶ寺および末寺14ヶ寺を包括する。本尊は十一面観音で、西国三十三所観音霊場の第2番札所である。

寺域は紀ノ川河口平野の南部にある名草山（なくさやま、228.6メートル）の中腹にあって、境内から和歌浦湾を一望のもとに収める。山内に涌く三井水（さんせいすい：吉祥水・清浄水・楊柳水）は紀三井寺の名の由来とされ、いずれも水源には慶安3年（1650年）の年記とそれぞれの名水の名を刻銘した砂岩製の水槽がある。これらの水槽は徳川頼宣の命により設けられたものである。また、三井水は1985年（昭和60年）3月に環境庁（現・環境省）が選定した「名水百選」に選ばれている。



六角堂
江戸時代・寛延年間（1750頃）
建立
初代・二代目雑賀
弥左エ門建立。
西国三十三力所御
本尊をまつる



多宝塔（重要文化財）
室町時代・文安6年（1449）建立
嘉吉元年（1441年）倒壊した等に替わって再建された。
本瓦葺三間多宝塔。
下層は四本柱の方形、上層は十二本の柱を立て高欄をめぐらせた円形。
室町中期様式・五智如来をまつる。



楼門（重要文化財）
室町時代・永正6年（1509）建立
三間一戸・入母屋造・本瓦葺き
建立以来たびたびの修理を受け、桃山時代の様式を残す。（高欄付きの縁をめぐらせた通路や和様三手先腰組）
欄間には、牡丹と菊の彫刻があざやか。
金剛力士像を安置。



鐘楼 - 重要文化財
安土桃山時代・天正16年（1588）建立
入母屋造・本瓦葺き・袴腰。（腰板張りの下層）
全体に軽快な感じで、鐘楼建造物中の白眉とされている
重要文化財の建造物である。

「結縁坂」の由来

紀三井寺の楼門から上に、231段の急な石段があります。参詣者泣かせの急坂ですが、この坂は、結縁坂（けちえんざか）と呼ばれ、次のような“いわれ”が伝えられています。

「江戸時代の豪商・紀ノ国屋文左衛門は、若い頃にはここ紀州に住む、貧しいけれど孝心篤い青年でした。

ある日、母を背負って紀三井寺の表坂を登り、観音様にお詣りしておりましたところ、草履の鼻緒が切れてしまいました。困っていた文左衛門を見かけて、鼻緒をすげ替えてくれたのが、和歌浦湾、紀三井寺の真向かいにある玉津島神社の宮司の娘「おかよ」でした。これがきっかけとなって、文左衛門とおかよの間に恋が芽生え、二人は結ばれました。後に、文左衛門は宮司の出資金によって船を仕立て、蜜柑と材木を江戸へ送って大もうけをしたのでした。紀ノ国屋文左衛門の結婚と出世のきっかけとなった紀三井寺の表坂は、それ以来「結縁坂」と呼ばれるようになりました。」と。商売繁盛、良縁成就、その他何事もまずは、信心からと申せましょう。

玉津島神社

祭神として稚日女尊（わかひるめのみこと）、息長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）、衣通姫尊（そとおりひめのみこと）を祀る玉津島神社は、住吉大社、柿本大神とともに和歌三神とされています。

山部赤人も

「やすみしし わが大王の 常宮と 仕へまつれる 雑賀野ゆ
背向に見ゆる 沖つ島 清き渚に 風吹けば 白浪騒き
潮干れば 玉藻刈りつつ 神代より 然ぞ貴き 玉津島山」

と詠んでいるように

玉津島神社は和歌の神様らしく和歌にも数多く詠まれています。

また、和歌浦にある船頭山、妙見山、雲蓋山、奠供山、鏡山、妹背山の六つの山は、その昔は小島だったようでそれらの小島をみんな、玉津島山と呼んでいたようです。

玉津島神社のいわれを記したご由緒書の中ほどに「住吉神社、人丸神社（柿本大神）とともに和歌三神として・・・」と記されています。



鳥居

鮮やかな朱色の鳥居。この鳥居の左手にある赤い堀は、絶世の美女としても有名な平安の歌人“小野小町”が、衣通姫尊を慕って玉津島神社に参拝したおりに上掛けをかけたと言われている「小町袖掛けの堀」です。

拝殿

この拝殿の奥に本殿があります。

聖なる地、国名勝「和歌の浦」にたたずむ玉津島神社と鹽竈神社。

玉津島神社は古来より、和歌の神様を祀る神社として天皇や貴族、歌人たちに崇拜されてきました。

また鹽竈神社は、安産・子授けの神として篤い信仰を集めています。

玉津島神社境内には、歌の上達を願う小野小町が同社に参詣した折、袖を掛けて和歌を詠んだという「小野小町袖掛けの堀」がありますが、和歌の神であり、たおやかな美女でもある衣通姫尊（玉津島明神）は能・狂言などで大きな役割を果たしてきました。

能「鸚鵡（おうむ）小町」では、在原業平（ありわらのなりひら）が玉津島社で法楽の舞を舞ったことを知った小野小町が「われも」と玉津島社に参詣し、「草子洗（そうしあらい）小町」や「関寺（せきでら）小町」では衣通姫について語られます。

「和歌の心を種として、和歌の心を種として、玉津島詣で急がん」と謡うのは、狂言『業平餅』の在原業平。謡曲『蟻通（ありどおし）』では紀貫之が、「我、和歌の道に交はるとは申せども、いまだ玉津島の明神へ参らず候ほどに」と玉津島社を目指します。

さらに『源氏物語』や『宇津保物語』『平家物語』『源平盛衰記』『明德記』などにも登場しています。『平家物語』では平維盛（たいらのこれもり）が、「衣通り姫の神とあらはれたまえる玉津島の明神」と語り、『源氏物語』で紫式部は、紫の上を和歌の浦・玉津島と関わりの深い女性として描きました。紫の上を衣通姫に喩えたのでしょうか。

妹背山と三断橋

平安時代には、紀の川(現在の和歌川) 河口に玉津島山と呼ばれる6つの島が浮かび、片男波の砂嘴や干潟とともに、和歌浦の美しい景観を形成していました。やがて、陸地化と埋立が進行して、現在は妹背山のみが島として当時の風景を留めています。

江戸時代になり、徳川頼宣が妹背山に母(萬)の供養のために海禅院多宝塔を建て、三断橋を架けました。中国の杭州の西湖に架かる橋をモデルにしたと伝えられています。3つの小さなアーチ式の石橋を、石積みみの堤防状通路で繋いだ形が特徴です。



観海閣

和歌川の河口に浮かぶ妹背山、その東側に干潟の上に半分せり出して立っているのが観海閣です。満潮時には海に浮かぶように見えます。初代の木造の観海閣は1648～1652年頃に徳川頼宣によって建てられました。ここからは名草山と共に紀三井寺が正面に眺められ、手前に干潟が広がります。万葉集にも詠われたその景色は、和歌浦の代表的な景観として人々に支持されて、1950年に「新日本観光地100選」の海岸部門で和歌浦・友が島が1位に選ばれ、当時の記念切手の図案に選ばれています。残念ながら、昭和36年に第2室戸台風で倒壊し、コンクリートで再建されたのが現在の観海閣です。

不老橋

徳川家康を祀る和歌祭の際、関係者を片男波近くにあった御旅所に向かうために通行する“お成り道”に架けられた橋である。なんととってもその形は独特で江戸時代にしては珍しくアーチ型石橋で構成される。材料となった石は和歌山城の石垣でも利用された和泉砂岩が利用されており、肥後熊本の石工集団によってアーチ部分が構成されたと推定されている。特に勾欄部分の彫刻が優れています。

この橋は鏡山の山頂からも、妹背山からも、多宝塔からも望むことができどの角度からも眺めてもその造形美は賛美に値する。





「和歌浦・片男波公園ガイド」

万葉集に収められている4,516首の歌の中には、紀伊国（きのくに）和歌山で詠まれた107首の歌が含まれ、その中には和歌浦の地で詠まれた13首の歌も含まれています。

この万葉集に収められている山部赤人が詠んだ

『若の浦に 潮満ち来れば 湯を無み
葦辺をさして 鶴鳴き渡る』

という歌にでてくる「湯を無み」が「片男波」の地名として今に伝わったと言われています。

片男波公園

和歌山市の南西、和歌川と和歌浦湾に挟まれた小さな“半島”、万葉集にも詠まれている片男波の地に片男波公園があります。

片男波公園の中には、万葉館、健康館、レストラン、芝生広場、万葉の小路などの施設があり、万葉人の生活に触れたり、夕陽を見ながら食事をとったり、ウォーキングしたり、広い芝生の広場でお弁当を広げたりと子供から老人までそれぞれの楽しみ方でゆったりとした時間を過ごせる公園です。

万葉館

万葉館は、片男波公園の施設の中でもオススメの施設です。

万葉館は、“万葉館”と言う名称が表しているように、万葉集に関する研究や万葉集と和歌山との関係などについて、実物や複製、解説パネル、万葉シアターを通じて、万葉集の世界に触れられるようになっています。

特に万葉シアターでは、漫画家の里中満智子さんのイラストで綴った「紀伊国の万葉歌」（16分）と俳優の柴俊夫さんと藤田弓子さんが声で出演している「紀伊国万葉の旅」（14分）が上映されています。万葉集と和歌山のつながりがよく分かります。

「万葉館」

- ・開館時間 9:00～17:00（入館は16:30まで） ・入館料 大人 200円
- ・休館日 年中無休（但し、12/28～1/4及び設備点検日を除く）



万葉館の大きく開いたガラス窓からは、正面には紀三井寺で有名な名草山や

（名草山の中腹より少し下に見える“白い建物”が桜で有名な紀三井寺です）

左手には妹背山が見えます。（街路灯の柱がじゃまですが。。。）

万葉の小路

日本庭園を抜けていくとその奥には、全長約280mの万葉の小路が広がっています。

万葉の小路のスタート地点には、「万葉の小路の歌碑について」の掲示板があり万葉の小路に建てられている歌碑の説明が書かれています。

この万葉の小路には、和歌浦や玉津島にゆかりのある5つの歌碑が建てられています。



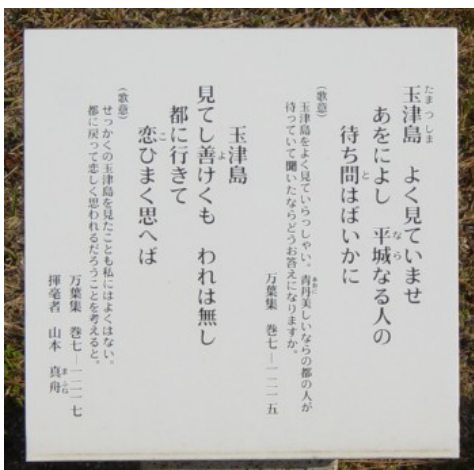
掲示板を抜け先に進んでいくとこのような石造りの小路が2本、片男波公園の先端まで続いています。デコボコのない造りになっているので歩きやすい小路です。この小路を歩いていくと5つの歌碑を見ることができます。



それぞれの歌碑には、歌意を書いたプレートが横に建てられています。

最初の歌碑には、

『衣手の 真若の浦の 真砂子地 間無く時無し わが恋ふらくは』
の歌が刻まれています。



二番目の歌碑は、

『玉津島 よく見ていませ
あをによし 平城なる人の 待ち問
はばいかに』

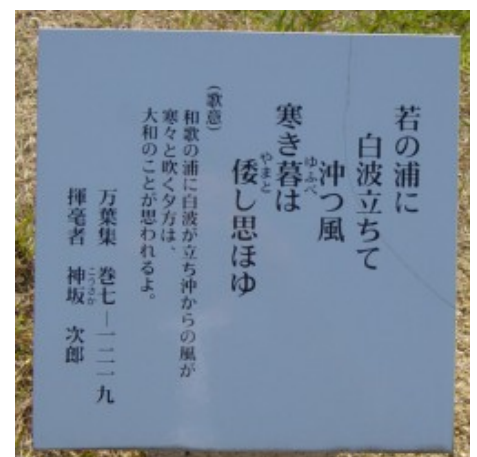
『玉津島 見てし善けくも
われは無し 都に行きて 恋ひまく
思へば』
の二つの歌が刻まれています。



『名草山、言にしありけり わが恋の
千重の一重も 慰めなくに』



『若の浦に 袖さへ濡れて 忘貝
拾へど妹は 忘らえなくに』



『若の浦に 白波立ちて 沖つ風
寒き暮は 倭し思ほゆ』



紀州東照宮

和歌の浦には名所がござる、一に権現」とうたわれたのが、この東照宮。

古くより「権現さん」の愛称で親しまれ国の重要文化財としても指定されている徳川家ゆかりの神社。

ご本殿は侍(さむらい)坂とよばれる一〇八段の石段の上にあり、精巧な彫刻と狩野、土佐両派の絵によって荘厳された豪華さは、まさに「関西日光」の名にふさわしいたたずまい。また楼門の朱塗り極彩色は、関西随一といわれています。



本殿・拝殿の周囲には、安土桃山時代の遺風を受け継ぐ江戸初期の彫刻や壁画があり、その御由緒を職員が説明しながらご案内します。詳しくは社務所まで



拝観のご案内

国指定重要文化財の本殿・拝殿・唐門を拝観
(職員の説明付き)
所要時間 10分～15分程度



元和7年(1621年)に徳川家康の十男である紀州藩祖・徳川頼宣により南海道の総鎮護として創建され、関西の日光とも称される。本殿は伝・左甚五郎作の彫刻や狩野探幽作の襖絵がある。

東照宮は、雑賀山に位置する。雑賀山は和歌浦湾の入り江を眼下に納め、右手には天橋立のような片男波の砂嘴が延び、左手には北岸をみるまさに「扇の要」の位置である。西には天満宮が、東には玉津嶋神社が位置する。

鬱蒼とした木々に囲まれた東照宮参道は青石が敷き詰められ、両側は低い石垣で区切られる。鍵の手で折れ曲がると、急勾配の108段の石段にたどり着く。参道と石段の両側には、家臣団が寄進した石灯籠が並ぶ。

高台の南端には、楼門が南面し、その両脇に東西廻廊が建つ。高さ約2mの石垣により一段高くなった社地北側には、唐門と瑞垣(みずがき)、その奥には正面に拝殿・石の間・本殿を一つの建物にまとめた権現造りの社殿が建つ。

和歌浦天満宮

和歌浦湾を見守る学問の神様

学問の神様である菅原道真が祀られ、大宰府天満宮、北野天満宮とともに日本の三菅廟といわれています。建築にあたったのは紀州根来出身の平内吉政・政信親子。後に政信は江戸幕府の作事方大棟梁になった当代屈指の工匠です。楼門は一間楼門として最大規模。本殿は国重要文化財で、内外部ともに美しい極彩色が施されています。



延喜元年（901年）に菅原道真が大宰府に向かう途中、海上の風波を避けるために和歌浦に船を停泊した。その時、神社が鎮座する天神山から和歌の浦を望み、2首の歌を詠んだ。その後、村上天皇の康保年間（964 - 968年）に参議橘直幹が大宰府から帰京する途中に和歌浦へ立ち寄り、この地に神殿を建て道真の神霊を勧進して祀ったのが始まりとされる。また、道真が立ち寄った際に、敷物がなく、漁師が船の鰯網を敷物（円座）にして迎えたといい、鰯敷天神とも称せられるという。天満宮は和歌浦天神山（標高約93m）の中腹に位置し、菅原道真を祀り、和歌浦一円の氏神として尊崇されている。



全国に天満宮と称する神社は数多くあるが、江戸時代の朱子学者で、徳川家康のブレーンも勤めた林羅山は、元和7年（1621年）、この地を訪れ、和歌浦天満宮は太宰府天満宮、北野天満宮と共に由緒がある神社であると言っている。

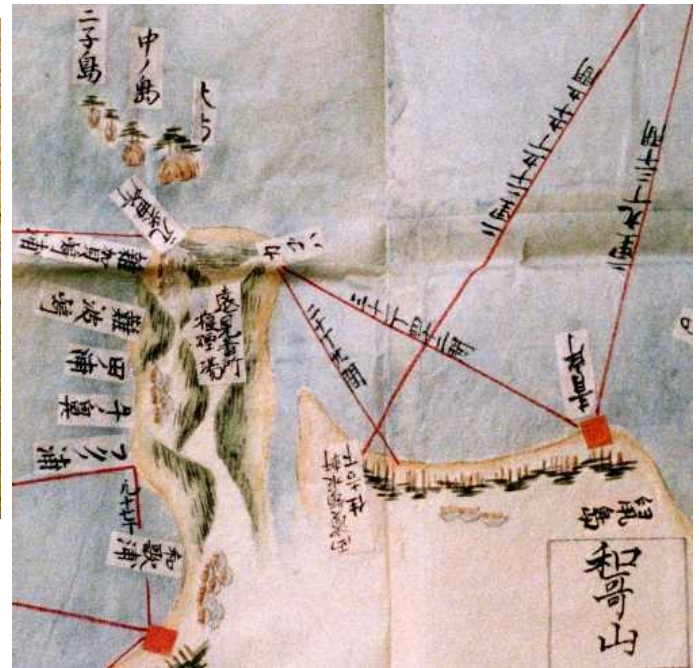
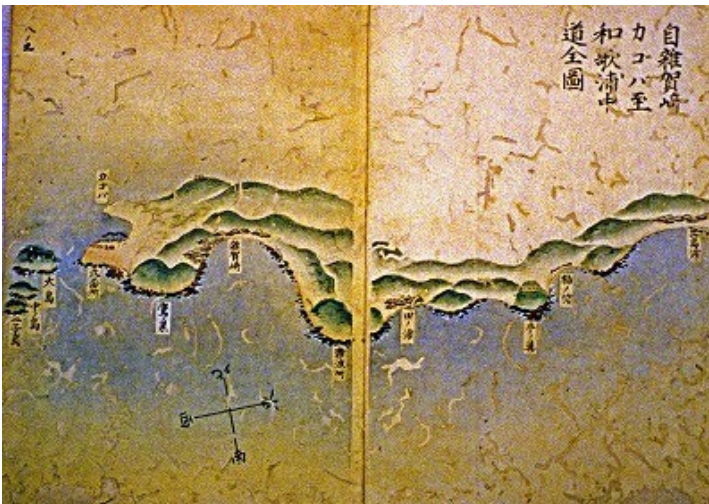
社殿は、豊臣秀吉の天正13年（1585年）の兵火の後、桑山重晴、浅野幸長により再建された。浅野幸長は、慶長9年（1604年）～同11年（1606年）にかけて天神山の中腹を開墾して社地を造成し、本殿、唐門、拝殿、楼門、東西廻廊などを再建したが、これが現存する天満神社である。本殿奥や楼門前面の石垣も、この時造られたものである。再建された本殿、楼門など4棟が重要文化財に指定されている。本殿は桁行五間・梁間二間の入母屋造で、装飾性の豊かな桃山建築である。正面の楼門は一間一戸門としては最大級で、禅宗様を取り入れている。本殿、楼門等の建築や彫刻には、江戸幕府御大工棟梁の平内政信（へいのうちまさのぶ）が関わった。

番所庭園(ばんどこていえん)

入 園 料 金 : 大人 600円

黒船の見張り番所の跡

番所庭園の有るここは、地図にも出ている様に「番所の鼻」と言い、平坦で海に長く突き出た地形で、紀州藩は海の防備見張りのため遠見番所を設けました。藩領の長い海岸線十数ヶ所に番所がありましたが、ここはその中でも和歌山城に最も近い番所として、狼煙場と共に重要な所でした。其の後、遠見番所は鷹の巣山頂へ移転したので、ここは「元番所」とも呼ばれたのです。米国ペリーの来航（嘉永六年一八五三年）を機に、紀州藩も本格的に海防に取り組み始めました。翌年安政元年（一八五四年）に家老三浦長門守御持場「元番所お台場」が、当庭園大芝生の所に構築されました。紀州藩が出版した異船記には、この元番所お台場全体の鳥瞰絵図や大砲・鉄砲・人員の配置などが詳細に記載されています。（和歌山県立図書館蔵書）



万葉ゆかりの地

万葉時代神亀（七二四年）十月に、聖武天皇が大和の都から、お供の公家・宮廷人達と、和歌の浦に行幸されました折、藤原卿がここ番所庭園の北側に広がる海「雑賀の浦」の漁火を見て、詠まれたと言われている次の歌はあまりにも有名です。

紀の国の 雑賀(さひか)の浦(うら)に 出(い)で見れば
海女(あま)の燈火(ともしび) 波の間(ま)ゆ見ゆ

昭和五二年に、宇治田省三和歌山市長は、犬養 孝大阪大学名誉教授に依頼して、市域を詠んだ万葉歌十首と、その故地十箇所の現地を選んで頂き、そこにその歌板と歌碑を建立されました。犬養先生が、その中の一つに選ばれた「雑賀の浦」の歌板と歌碑は、当園内に今も大切に管理されています。



養翠園

入園料 大人 600円

「養翠園」は紀州徳川家第十代藩主 徳川 治寶 が隠居所であった西浜御殿からの清遊の場、外来者の接待の場、として1818年（文政元年）より8年ほどかけて造営した 大名庭園で、敷地面積約7,000坪あり、池が3,500坪あります。

養翠園庭園

養翠園庭園は池泉回遊式、船遊式、借景式の名大庭園で、大名庭園でありながら御茶を楽しむという目的のため花物は季節を知るためカキツバタ、アヤメ、アジサイ、ツバキ、等有りますが、現在の公園のように沢山の数はなく、松を主体とした庭園となっています。

松は約1,100本あり、仕立ては「立華すかし」と言う手法で、下から上に持ち上げるような格好に仕立てられ、京風の仕立てと違い線の太い豪快な仕立て方法となっています。

養翠園は大浦湾、水軒浜、の海浜に隣接していますが、庭園は海の景色を意図的に取り入れず、正面には天神山、側面には高積山、の山並みの景色を借景とし、海と山の対比を考えて作られています。

又、海浜の特長を生かし、池は海水を取り入れた「汐入」で、2ヶ所に樋門があり、潮位で変化のある池の水位を調整しています。池が海水のため、魚はイナ、ウナギ、ハゼ、など海と川の境目に生息する生物が沢山居ります。このような海水を取り入れた「汐入」大名庭園は現在、全国で「養翠園」と東京の将軍家のお庭であった「浜離宮庭園」の2ヶ所だけです。

庭園の景色は大きく2つに分けられ、三ッ橋、守護神島、太鼓橋、より東方は直線的な護岸壁を持つ西湖を模したと言われる中国的手法で作られ、護岸壁の直線と山の曲線の対比をよく考えて作られていると言われています。西方、建物寄りには曲線的な護岸壁を持った日本式手法で作られ、庭を周遊しながらその景色の変化を楽しむ構造となっています。



養翠園全景

養翠亭 御座の間前より見た風景で正面の山（天神山）を借景としている。

日頃は、養翠亭の外観は御覧戴けますが、養翠亭内部の一般公開はしていません。



養翠園 三ッ橋 風景

中国の西湖を模したと言われる景観で、この堤より左が直線的な護岸をもった中国式の庭園、右が曲線的な護岸をもった日本式庭園となっている。正面は借景となっている高積山。



養翠園 守護神島 風景

この庭の守護神として稻荷社、弁天社が祭られている。池中の守護神島とは太鼓橋、三ッ橋で周囲の庭園と結ばれている。

和歌山城の稻荷社のお祭が初午なので養翠園は二の午にお祭を行います。

湊御殿は、紀州藩 2 代藩主徳川光貞（みつさだ・1626～1705）の隠居所として元禄 1 1 年（1698）に造営されました。隠居した藩主が生活するために、湊御殿の敷地内にはたくさんの建物が建てられ、その中の一つに今回移築された湊御殿（奥御殿）がありました。湊御殿があった場所は、和歌山城より南西方向、現在の和歌山市湊御殿 1 丁目から 3 丁目にあたります。現在の地名は、この御殿があったことに由来しています。

ところが、湊御殿は何度か火事になり多くの建物が焼失し、その都度再建されました。移築された湊御殿（奥御殿）の建築年代については、移築工事中に小屋束から「天保四年四月十三日 改」と墨書きされた部材が発見されたことから、1 1 代藩主徳川齊順（なりゆき・1801～1846）が、消失した湊御殿の再建を天保 3 年（1832）に命じ、同 5 年に完成させたものと考えられています。

再建された湊御殿は、江戸屋敷を模して広壮善美を尽くし、藩政の政庁としての機能を持った建造物群であり、重要な役割を担う場所となりましたが、今回の移築工事の過程で、部屋の天井隅にある油煙抜きにも「竹之御間北御入側」・「溜之御間」・小屋束に「波の御廊下 め二 口込敷桁上」等の墨書が発見され、それぞれ「竹之間」・「溜之間」・「波の廊下」と呼ばれた部屋が存在が確認でき、またこれらの部屋の焼け残った部材をこの建物に再利用していたこともわかりました。

明治になり、湊御殿にあった多くの建物は取り壊されましたが、いくつかの建物は寺院や個人の建物として移築されました。この建物は明治初年に湊御殿から和歌浦東へ移築された後、今回、当地に移築されました。

建物は書院造りで、上の間（床の間のある部屋）・次の間・入側廊下などがあります。柱（四寸七分角）は上質の桐柱材を使用し、太く武骨な感じで、武家住宅としての力強さを感じさせます。また、長押をめぐらし、欄間がつけられた格式ある建物であることがわかります。さらに、開口部を広くとり、当時は上の間からの景色を借景として取り込んだと思われる演出がなされています。

天井には鳥の子紙が貼られ、入側廊下の奥にある杉戸には、紀州藩御用絵師である狩野派による華麗な障壁画が残されています。また、床の間の棚まわりには葵紋の金具が取り付けられ、紀州徳川家の建物であったことを今に伝えています。なお、床の間の裏側は、明治の移築以降に改造されています。

このように、隠居した藩主が余生を過ごすに相応しい品格を備え、当時の武家生活の空間を今に体験できる貴重な建物になっています。



湊御殿（奥御殿）概要

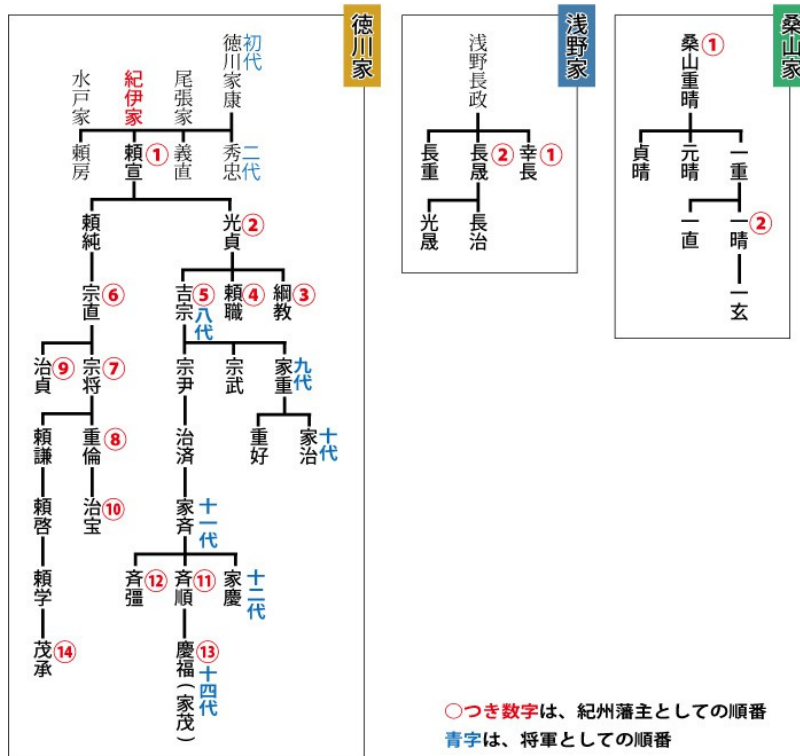
名称	湊御殿（奥御殿）
指定年月日	昭和42年2月14日 建造物1棟
所有者	和歌山市
構造	木造・寄棟造・桧瓦葺・平屋建
規模	梁間10.86メートル、桁行18.1メートル
建築面積	228.96平方メートル
建築年代	天保5年（1834年）
附属建物	薬医門（紀州藩御仕入方役所の門）1棟

和歌山城 わかやまじょう



和歌山城天守閣

料金:大人410円



和歌山中心部にそびえる天守閣財団法人日本城郭協会より「日本名城100選」の1つに選定されています。こんもりと緑茂る虎伏山（とらふすやま）に白亜の天守閣がそびえ、御三家の威容にふさわしい風格を醸し出しています。

和歌山城は、天正13年（1585）に紀州を平定した豊臣秀吉が弟の秀長に築城させたのが始まりです。その築城を担当したのが、築城の名人藤堂高虎（とうどうたかとら）でした。

まず、秀長の城代として桑山重晴（くわやましげはる）が入り、慶長5年（1600）には、関ヶ原の戦いで功をたてた浅野幸長（あさのよしなが）が入城。

そして、元和5年（1619）には徳川家康の第10男・頼宣（よりのぶ）が入城し、紀州55万5千石の城となり、以来、水戸・尾張と並び、徳川御三家のひとつとして、長い歴史を刻んできました。

和歌山城の石垣には、紀州特産の青石（緑泥片岩）が多く使われ、たしかに和歌山にきたことを実感させてくれます。

天守閣に登れば、和歌山市街が見渡せ、紀ノ川がゆったり流れているのがよくわかります。

伏虎像



江戸時代、和歌山城は別名「虎伏竹垣城」と呼ばれました。これは、和歌山城の建つ山が虎の伏した姿に似ていたためと言われています。

この像は、和歌山城の別名にちなんで、昭和三十四年に作られました。

御橋廊下



御橋廊下は、江戸時代には藩主とお付の者だけが藩の政庁や藩主の生活の場である二の丸と紅葉庭園のある西の丸を行き来するために架けられた橋で、屋根を設け、外からは見えないつくりになっていました。斜めに架かる橋としては、全国的にも珍しい構造です。

約11度の角度で斜めになっているため、滑り止めのために段差がつけられています。

紅葉溪庭園 もみじだにていえん



和歌山城内にある風雅な庭園。天守閣から北側にある裏坂を下り、両手に白い土塀と青石の石垣が迫る小道をサクサクと歩いていくとひなびた茅門が見えてきます。ここをくぐると、静まり返った空間が開け、都会にいるのを忘れてしまいそうになります。

紅葉溪庭園（西の丸庭園）は、徳川頼宣が西の丸御殿に築いたもの。浅野公時代に築かれた内堀の一部と、虎伏山の起伏をたくみに利用した、どこか大らかな感じのする庭園です。

堀の中に浮かぶ「鳶魚閣（えんぎょかく）」は、雨の日に出かけるとまた格別で、けむるような水面に釣殿がほのかに浮かび上がった時、こころが震えます。

池は山すそから湧き出る泉を利用して作られ、池の中央には舟の形をした「御舟石」があります。

鯉がのどかに泳いでいて、目を楽しませてくれます。

紅葉溪橋をはじめ、土橋、石橋と風情のある橋がたくさんかかっていて、滝の音が何とも心地よい気分。

日頃の疲れが洗い清められるようです。

紅松庵 こうしょうあん



苔に覆われた庭園で、お茶を愉しむ。

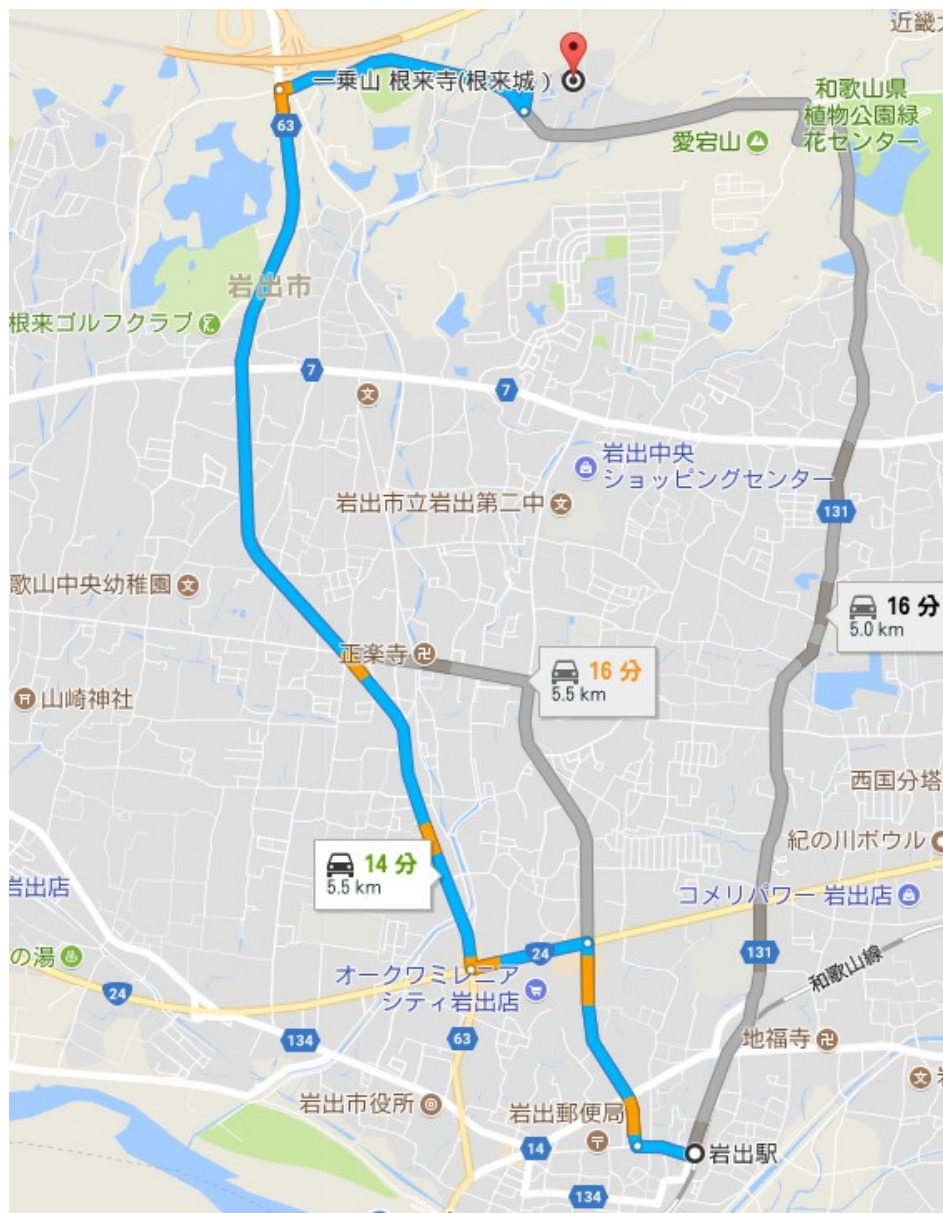
木造銅板葺きの屋根が美しく映える紅松庵は、紅葉溪にある茶室。

昭和48年に和歌山市の名誉市民である故松下幸之助氏が市に寄贈したものです。

数奇屋造りの建物や苔におおわれた庭には、すがすがしくひきしまった空気が流れ、心身ともにすっきりすること請け合いです。

中では気軽に一服を楽しむことができます。

料金:お抹茶一服460円（生菓子付き）



入山料

大人(中学生以上)1人 500円

岩出タクシー

0736-62-2181

根来タクシー

0120-254-351





大塔（多宝塔）

真言密教の教義を形の上で示したものです。天文16年（1547）に建立され我国最大の木造多宝塔で、秀吉の紀州攻めから残ったものであり、その頃の戦乱の弾痕がはっきりと残っています。明治32年に国宝に指定されています（高さ40m、横幅15m）



聖天堂

名勝聖天池に浮かぶ堂は聖天堂で聖天尊を安置しています。この堂正面の朱塗の壇が有名な「根来塗」で古くから伝わっているものです。



大師堂

真言宗を開宗された弘法大師空海上人像を本尊として祀っています。創建は大塔と同時代の建物で天正の兵火から残ったもので、内部の須弥壇と併せて重要文化財に指定されている。



大伝法堂（三尊像）



尊勝仏頂



大日如来



金剛薩埵

根来寺を総括した本堂であります。中央に大日如来、左脇に金剛薩た、右脇に尊勝仏頂尊を安置してあります。現在のお堂は文政十年（1827年）に再建されたものであります。

三尊像は根来寺の本堂である大傳法堂に安置されている。本尊は大日如来で、大きさは約5mあり、左脇に金剛薩た、右脇に尊勝仏頂尊。国の重要文化財に指定されている。

鉄砲伝来

鉄砲 天文12年（1543）8月25日（種子島の門倉岬）に明国船の姿現われ、三名のポルトガル人（南蛮人）により鉄砲火薬その他西欧文物が伝えられた。根来寺杉の坊算長（津田監物）は自ら種子島に渡り、鉄砲と火薬の製法を習いこれを根来の地に持ち帰りました。その鉄砲と同じ物を根来坂本に住む、堺の鍛冶師、芝辻清右衛門に製作させたのが本州最初の鉄砲と言われています。

津田監物

津田家家系図 種子島家の「鉄炮記」に現れる津田監物丞なる人物は種子島家の家臣のごとく表現され、時堯の使者として紀州の根来寺杉の坊某公に伝来銃の一丁を届けたとされている。 天文13年、津田監物は堺鉄砲鍛冶の始祖たる刀工、芝辻清右衛門妙西に伝来銃を示しこれを倣製せしめた。本州における最初の国産火縄銃は紀州根来寺の門前町、西坂本の芝辻鍛刀場にて津田監物のプロデュースのもとに誕生したのである。

我が国最古の砲術、津田流もまた津田監物をもって創始者とする。根来寺僧兵により鉄砲隊を創設し、永禄・元亀・天正の各年を紀泉に転戦し激戦を重ねたのも津田監物である。 紀州・津田家は河内交野の津田国見山城主周防守正信を出自とする。那賀郡小倉に住した津田家は將軍義晴より、従五位下小監物を叙せられ、後に根来寺・杉之坊惣門主となり杉之坊僧兵軍団は津田一族によって統率された。津田監物算行、監物算長、監物算正、監物重長に加へ、監物を冠称しなかった杉之坊院主・津田明算、二代院主津田照算をも津田監物と呼称した所に、多くの文献の錯乱と異説が生まれたのである。

根来寺を代表して杉之坊明算が種子島家に公式に伝来銃割愛を要望し、津田監物算長が使者となり根来へ持ち帰った、算長は芝辻に倣製を命じ、国産化と量産化に成功した。根来鉄砲隊を創設し、砲術を工夫しその精鋭度を高めた。津田流砲術の始祖となり、実子算正と照算に継承せしめる。しかし、この津田監物算長は永禄11年12月22日、69歳の天寿を得て没する。弟明算も永禄元年すでに先だち、算長の子照算が杉之坊惣門主となり元亀・天正の根来軍団の総指揮者として門跡を継いでいる。天正13年3月21日、根来寺の砦にて鬼神の如く荒れ狂い、幾多の剛敵を討ち取りながらついに増田長盛の手に殞れた津田監物とは、実に杉之坊二代目院主・津田照算その人であった。照算は自由斎を号し、父算長に劣らぬ砲術家であり、その系統は没後重長に継がれ津田流・自由斎流として後世の数多くの砲術流派の根幹となった。すなわち津田流は津田守勝へ自由斎流は津田自由齊世徳へ伝えられ、この後津田家の血伝は失われて行く。津田監物算長こそが根来鉄砲の普及者であり、和流砲術の宗祖であり、根来鉄砲隊の創始者である。根来寺滅亡の悲惨な最後を知ることなく、紀の川市安楽川の墓石の下に静かな眠りを続けている。

根来寺行人方の和泉進出

根来寺 建武4年（1337年）に足利尊氏から和泉国信達庄の寄進を受けたのをきっかけとして、根来寺勢力は風吹峠を越えて和泉国に進出しました。 根来寺行人方と反守護勢力の在地武士団が連合したことにより強力な軍事力で他領の荘園代官職を獲得したり、高利貸を営みながら、その勢力を拡大していきました。

信長の雑賀攻めと根来行人勢

戦国時代の根来寺の勢力は、南河内から和泉、岸和田付近まで及んでいました。鉄砲をいち早く取り入れた強力な武装集団として、戦国大名にとっても無視できない存在でした。天下統一を目指す織田信長は、石山本願寺の制圧にのりだしますが、容易に陥落せず、天正5年、本願寺の兵力の一翼を担う雑賀党を攻めます。この時、杉之坊などの行人方は利権を守るために、顕如上人の願いを退け、信長に味方しました。その結果、鈴木孫一らに率いられる雑賀衆は、信長の軍門に下りました。その余勢をかって信長は、高野山を攻めますが、根来の軍勢の動向を意識し、決定的な策をとれませんでした。

秀吉の紀州攻め

信長没後、羽柴秀吉が天下統一にのりだし、尾張で徳川家康・織田信雄の連合軍を攻めました。この時、秀吉の制圧を予期した根来勢は、徳川・織田方と通じ、岸和田城を攻めますが、秀吉の留守部隊に敗れます。翌天正13年、徳川家康と和議を結んだ秀吉は、「根来一寺を滅ぼせば、紀州の諸豪族は刃を交えず降伏する」と、根来勢の徹底壊滅にのり出しました。すさまじい勢いの秀吉軍10万の大軍を相手に根来勢は、積善寺をはじめ、千石堀、沢、畠中と次々に出城を攻め落とされ、根来寺に秀吉軍が着いた時には、寺衆すでになく抵抗する者はいなかったと伝えられます。そして、中世の紀北を席卷した根来寺を根絶するかのよう、根来一山は灰燼と化したのです。

西国三十三箇所観音霊場 第三番札所

粉河寺

最寄り駅はＪＲ和歌山線・粉河駅。

駅から山門までは、「とんまか通り」と呼ばれる典型的な門前町を形成しています。駅から約800メートルの道程で徒歩約15分。朱塗りの楼門が見えてきます。

開祖 大伴孔子古（おおとものくじこ）

宗派 粉河観音宗（こかわかんのんしゅう）

本尊 千手千眼観世音菩薩

（せんじゅせんげんかんぜおんぼさつ）

【草創】

奈良時代末 宝亀元年(770)の開創。当時、紀伊国那賀郡に住む 獵師大伴孔子古は、いつも幽谷の樹幹に足場を定めて、夜ごと猪や 鹿を狙っていたが、ある晩、光明輝く地を発見、発心してその場所に柴の庵を建てた。

後日、一夜を泊めてもらった童行者は、孔子古の願い(庵に仏像を安置すること)をかなえてやろうと、七日七夜、庵にこもり、等身の千手観音像を刻み立ち去った。

その後時移り、河内国の長者佐太夫の一人娘が長患いしていた。そこへ童行者が訪ね来て千手陀羅尼を誦して祈祷、やがて娘の病は回復した。童行者は長者がお礼にと申し出た七珍万宝を断り、娘が捧げるさげさや(お簪箱)と袴のみを手に「紀伊国那賀郡粉河の者だ」とのみ告げて立ち去った。

翌年春、長者一家は粉河を訪れたが、探しあぐねて小川の傍らで一休み、ふと流れる水が米のとぎ汁のように白いのに気がつき、粉河の証であることを確信、さらにその川を遡り庵を発見した。扉を開けると千手観音が安置され、娘が差し出したさげさやと袴を持たれていたので、かの童行者は、実は千手観音の化身であったことが分かった。

この開創の由来は、当寺所蔵の粉河寺縁起絵巻(国宝)等にて伝えられている。



大門【重要文化財指定】

規模の大きい三間楼門で、和歌山県では、高野山・根来寺に次ぐ威容を誇る。宝永四年（一七〇六）総檜造り。金剛力士は仏師春日の作と云われ、尊像の用材は桂の巨木。

大門をくぐると、大小20有余の堂塔伽藍が建つ35,000坪の広大な境内地。本道まで約200mの石畳の参道が続きます。



中門【重要文化財指定】

三間二戸の桜門として標準的な規模をもち、軒まわりまで良質の檜（けやき）材で繊細な建物に仕上げられています。

中門をくぐると、左手に粉河寺庭園と本堂が見えてきます。



粉河寺庭園【国指定名勝】

本堂の前庭とその下の広場との高低差を利用して作られた、日本庭園の中でも先例のない石組みの庭園。

雄大な本堂を本堂下の広場から仰ぎ見るときの前景でもある、珍しい様式の庭園です。

史跡名勝天然記念物

粉河寺（施音寺）は、国宝粉河寺縁起絵巻などで有名な西国巡礼の霊場の一つとして知られる。今回指定する庭園は、本堂と山門との間の広場をその保存区域とする破格のものである。山門から約3メートルの高さの石段を経て本堂に至るが、この庭は石段の両翼に、土留め石垣の用をも兼ねて組み上げられた石の庭である。それは、主として緑泥片岩に属する巨大な岩石が多数しかも変化に富む手法で堅固に、美しく組み立てられている。ツツジの刈込みで石の間隙をうずめ、さらにジャクシン・シダレザクラ・ソテツなどを植えて飾る。石組全体の構成は向かって左手に重点をおき、枯れ滝・石橋・鶴亀の島などを象徴的に表現し、右手にゆくに従って石の扱いは軽くなっている。

このような構成は庭園としては異例のものであるが、独創的な制作意欲がよくうかがわれる点で、他の定型的作庭には見られない魅力に満ちている。

粉河寺は変遷が多く、作庭の年代も不明であるが、手法からみて桃山時代の豪華な作風が如実にあらわれており、江戸時代初期を下らないころの作であろう。



本堂【重要文化財指定】

8世紀（770年）の創建より、数度の造営と改造を繰り返し、現存の当本堂は享保5年（1720年）に再建されました。

江戸時代中期の檜（けやき）材による代表的建築で、西国三十三ヶ所の中で最大。

他に類例を見ない特異な形態で、一重屋根の礼堂と二重屋根の正堂とが結合した構成を持つ複合仏堂の形式です。



「野荒らしの虎」
徳川八代将軍吉宗の寄進
本堂内陣にて拝観可